

「文字が採用されたんだよ」と伝えたら、「文字なんて書いたことがなかったのに」と言いながらとても喜んでいました。そういう機会がなければ、視覚障害の人が文字を書く機会はなかなかなかったと思います。彼女のなかでも自分の書いたものがかたちになるということ、たとえ見えなくても、みんなからすごいよと声をかけてもらえる喜びの実感につながったのではないかと思います。「うまいね」とささきさんに声をかけてもらって、とてもうれしそうにしていたので、これも生きる自信になったのかなと。今度、文字を書いてみようかな」



「彼女の言葉を聞いて、とてもありがたい機会になったなと感じました。」

ささき ただ、ほんのちよつとのアレンジで、ロゴですごく変わるんですね。自由に書いてもらったみなさんの文字は大きすぎや太さもバラバラだったので、文字の大きさだけは揃えてみたりとか：わたしが意識したのはそれくらいですね。かたちはなるべく変えずに、ちよつとこつちを伸ばしてということになりました。

今野 こういうデザインのバランスは施設



「そう言っていただけだとありがたいですね。ささきさんにはしっかりと施設のなかにはいつか気持ちを入れて仕事をしたいだったので、エイブルアート・カンパニーとしてもありがたく感じていました。」

ささき 最終的には今野さんたちがそのまま持続して、時々わたしたちが遊びに来て、という姿をめざしてきました。みどり工房自身でやっていけるようにならないと意味がないですから。

今野 わたしたちも、自分たちできちんとやっていける仕組みを探していました。ささきさんは、そうしたわたしたちの気持ちをきちんとくんで協力してくださって、ありがとうございました。

のスタッフにはなかなかできないことなので、ささきさんがいてくださって本当に良かったです。」

「みなさんが楽しんでつくられている熱は、周りにもしっかりと伝わっていると感じています。このプロジェクトに関わって、ささきさん自身が変わったなと思うことはありましたか？」

ささき 一人で創作活動をしていると、どうしても自分のゴールとかクオリティを上げることに集中し、同時に売れる物をつくらなきゃいけないかったり、己との戦い。シビアでいてシンプルな構図です。みどり工房さんの場合は同じものづくりでも、ほかにも大事にしなくてはいけないことがいっぱいあった。メンバーたちの心情やテンポにあわせるというのがわたしにとってはじめての体験だったんです。そういう体験は自分の糧になったと思います。自分のテンポですずめていったら、メンバーは本当に振り落とされてしまいうし、強引にはできないなと思って、一つひとつ丁寧に時間を掛けて話しあいました。わたしたちよりもよっぽど時間をかけてものづくりをしている工房のみなさんは本当にすごいんです。ただ、ものづくりをしている人間はたくさんいるので、メンバーが持つ個性を文字や絵で引き出したり、もっと違う土俵で

「最後に、今後の展望をおしえてください。」

今野 地元のお店で売れるようにしていきたいですね。福祉業界だけでなく、一般の人にも商品を見てほしいと思っています。

ささき そうですね。まずは手の届く範囲で広がっていきましょう。

今野 メンバーは「ビルを建てたい」と言っているの(笑)、まずはおしゃれな雑貨屋さんで商品をおいてもらうところからスタートして、いつかはビルを建てられるように頑張っていきたいですね。

2014年3月 みどり工房若林にて

今野 本当に、この短期間でこんなに変わったんですもん。

ささき これも、エイブルアート・カンパニー、みどり工房のスタッフのみなさん、メンバーのみなさんとの対等な関係があったからだと思います。どれが欠けていてもダメだったと思います。多分、他のクリエイターで興味のある人はたくさんいると思うんです。でも、どのくらい関わった方がいいのか、メンバーのテンポなどもわからない。エイブルアート・カンパニーのサポートなしで、わたしがただポンと一人で入っていったのでは難しかっただろうし、メンバーの気持ちを一番わかっていけるのはやっぱり施設スタッフのみなさんです。から、むずかしいけれど、うまくかみあえばとても価値あるものが生まれると思います。

